

大使コラム (2012年7月)

7月、リスボンでも今年は天候不順が目立ちましたが、いよいよ夏の季節がやって来たようです。ただし、気温はまだ25度前後の日が続いており、先月末の40度近い蒸し暑い日は多くありません。例年より一月も遅れて、街路樹のジャカランダの花はようやく終わりつつあります。乾燥した心地よい気候に誘われるように、観光客は大分増えてきました。

先月は、再選挙の結果次第でギリシャのユーロ離脱もあり得るとの観測が流れ、またスペインの銀行支援や国債価格の下落などで、欧州経済危機への不安がさらに広がりました。しかし、ギリシャでは緊縮策を維持する政権が発足し、EUなどのスペイン支援にも方針が示されました。さらに月末の「欧州理事会」(EU首脳会議)で、財政危機国への支援に一定の対策が示されたことにより、当面の不安感は薄らいだように見えます。とは言え、欧州経済の脆弱性やユーロの制度的欠陥が根本的に解決されるまでの道程はまだまだ不透明です。

この状況の中、コエーリョ政権が先月、発足一周年を迎えました。この機会に同首相は、対外債務の削減、輸出増による経済効果、企業の民営化の進展などがこの一年の成果だったと説明しました。他方、失業率の増加とそのための公的負担の拡大、税収効果の不足などは予想以上に厳しいとの認識です。加えて、社会・経済の構造改革は、ポルトガル自体の努力だけでなく、外的要因にも依存している現実に言及しました。

これに対し、野党や労働組合も、現状への不満を代弁して、成長政策重視、労働法の改正反対等で政府へ圧力をかけています。しかし、最大野党の社会党は、「左翼政党として現状は遺憾であるが、もし政権についていたら出来ないような政策は、野党としても主張しない。」との責任ある姿勢を貫いていることは、注目に値します。

報道された世論調査によれば、5月末時点での与党の社会民主党への支持率は30%半ばで、昨年以来の低下傾向にあり、他方、野党の社会党は与党に近い支持率を得ているようです。緊縮策に対する国民の不満は、静かに広がっているということでしょうか。

なお、先月初めに発表されたトロイカ合意の履行状況に関する調査団の報告書(第4回目)でも、首相と同様の認識が示され、41億ユーロの支援融資が今期も支出されることが承認されました。

さて、6月10日は、16世紀後半にポルトガル文学の黄金時代を築いたルイス・デ・カモインスの命日で、当国のナショナル・デーである「ポルトガルの日」とされています。その祝賀行事は例年、全国のいずれかの地方都市を選んで開催されてきま

した。しかし今年には財政危機にあつて、地方都市での開催をやめ、リスボンで行われました。

前日から各種の行事が続く中、本年はジェロニモス修道院のサンタ・マリア教会にあるカモンイスの棺への礼拝も一連の行事に組み込まれました。また、軍隊のパレードや大統領の演説も同修道院前の広場で開催され、外交団も招待されました。

大統領は演説の中で、国民に向けて現下の緊縮政策に理解を求めたあと、海外在住のポルトガル人に対しても、ポルトガル経済の売り込みに外交使節として協力してほしいと訴えたのが印象的でした。カモンイスは16世紀の大航海時代に、当国の栄光の歴史を叙事詩に残した国民的文人として、現在でもポルトガル人団結の象徴的存在です。大統領の言葉には、国の危機を乗り越えようとするポルトガル人の意気込みすら感じさせられました。

また、6月13日にリスボンでは、同市の守護神を祭る「聖アントニオ祭」もあります。旧市街にある聖アントニオ教会では、礼拝する人々が朝から長い列を作ります。そして、午後にはこの聖人の像を乗せた御輿が僧侶達に担がれ、教区内を練り歩く厳粛な行事が見られます。礼拝に来るポルトガル人は、年配の人が多いいはいえ、若い人や家族連れも少なくありません。

この祭りには前夜祭があり、リスボンでは市民が前日の夜遅くまで、塩焼きにした旬の鰯を肴に酒を飲みお祝いします。市当局も、この時期に「リスボン祭り(フェスタ・ド・リスボア)」を開催し、前夜祭に合わせて市の中心部の大通りで市民団体などのパレードが行われます。聖アントニオ祭は、日本で言えば、ちょっとしたお盆の夏祭りのようなものでしょうか。

2日には、当館でもリスボン市及び「ポルトガル・日本友好協会」と共催で、第2回の「フェスタ・ド・ジャパン」(日本祭り)を、昨年と同じく市内のベレン地区にある「日本公園」で開催しました。今回も、当国にある多くの日本関連の団体や、車両関係の日本企業に出展いただき、また和食の軽食などを販売しました。仮設舞台では、日本の伝統音楽(和太鼓)や武道の公演、さらにコスプレ・コンテストなども行いました。午後から夜遅くまで、日本紹介の催しに4000人以上のリスボン市民がご来場下さり、お陰様で大変な好評を博することが出来ました。ご協力下さった皆様には、この機会に改めて御礼申し上げます。

来年は、1543年にポルトガル人が日本(種子島)来航から470周年ですので、記念行事としてさらに良い企画を考えたいと思っています。

さて、日本とポルトガルとの経済関係の発展を考えると、エネルギー分野での協力には大きな可能性があると思われます。日・ポ双方のニーズを勘案し、スマート・コミュニティの研究・開発のための実証実験を進めて、ビジネスにつなげようとの趣旨で、当国の経済・雇用省と日本のNEDO(独立行政法人、新エネルギー・産業技

術総合開発機構)は、3月に協力協定を結びました。その一環として、6月末に両者の共催で、今後の協力の方途を検討するセミナーが、多くの日本企業も参加して当地で開催されました。今後、具体的なプロジェクトへと発展していくことを期待したいと思います。

6月末には、リスボン近郊のカスカイス市で、同市の姉妹都市19市が海外から一堂に会する国際フォーラムがありました。日本からは、首都に近い観光都市という共通点のある熱海市(静岡県)が姉妹都市で、市長ご一行が市の文化団体の方々とともに来訪されました。フォーラムでは、市長が熱海の魅力を講演したほか、「熱海きもの倶楽部」の皆様の振り付けで地元の女性達をモデルに、和服のデモンストレーションも行われました。帯の背のお太鼓の部分をほどいて巧みに結び直し、いろいろな花の形を表現する美しいオリジナルな着付けは、会場を魅了しました。数ある参加都市の中でも熱海市の存在感は格別で、嬉しく思いました。これからも、両市の交流発展に当館も協力させて頂きたいと考えます。

姉妹都市交流に関してはこの他、来る8月に人吉市(熊本県)の青少年が恒例のホームステイで当国の姉妹都市のアブランテス市を来訪するそうです。先日、同市の市制記念日の式典に訪問した際にも、市長から右受け入れの準備を進めている旨の説明がありました。同市長は3月に人吉市を訪問しており、日本との文化、青年交流だけでなく、経済交流も進めるべく意欲的に行動されています。アブランテス市はリスボン北東約150キロにある、人口2万人弱の都市で、近くに三菱ふそうも出資するトラック製造工場があります。当館としても、交流の発展を応援していきたいと考えています。

また、当国のエヴォラ市と南島原市(長崎県)が、都市交流の提携に向けて話を進めています。今年の夏にも南島原市から代表団がエヴォラ市を訪れる予定で調整中の由です。

エヴォラ市は1584年に、天正遣欧少年使節団がリスボンからバチカンに向かう途次に滞在した町としても有名で、日本との姉妹都市にふさわしい所の一つといえましょう。この交流発展にも支援したいと考えています。

いよいよ夏の季節となりますが、皆様には、ご自愛のほどをお祈り申し上げます。